

「精神革命」の比較思想——その先にあるもの——

伊 東 俊太郎

一 現代における宗教対立という根本問題

今日「宗教」は、「科学」と並んで、現代文明の重要な根本問題を提起していると思われる。「科学」は核兵器や環境問題の危機により人間の生存を脅かしかねない面をもつが、宗教もまたその宗派の対立や抗争により、人類共存への途に立ちほだかっている面がある。近時のISのテロ行為、イスラエルとパレスチナの長びく抗争をはじめ、枚挙にいとまがない。また、歴史的にも十字軍におけるキリスト教とイスラムの間の戦いやキリスト教内部におけるカトリックとプロテスタントの殺し合いなどもまたきりがない。もともと心の平和を求めて、地球上のさまざまな地域に生まれた筈の宗教がこのような紛争をひき起こしているのは何故か。そこにはもちろん宗教以外の政治的・経済的理由もあつたことではあると思われるが、宗教的なも

のが主導していることも疑い得ない。それはそのようにして生まれた諸宗教、諸宗派の、「我が神尊し」とする自己絶対性が民族的狂信主義とも結びつき、互いに他に対して優越性を競い、他者を排他的におしのけて紛争を生み出していると云つてよいだろう。いったい宗教の他者認識というものはどうなっているのだろうか。つまり自宗教の外にある他宗教の人々とのように結ばれているのだろうか。

これこそ比較宗教学が明らかにすべき大きな課題であり、比較思想研究の果たすべき重大な役割の一つであろう。つまり比較思想は諸思想・諸宗教のそれぞれの特質を明らかにし、その比較研究により、それぞれの独自性を確認するとともに、その相異性を克服して、その間の共存・共生の可能性を追求するものと云つてよい。

筆者はここ一〇年来、「精神革命」の比較研究というテーマ

に従事し、ギリシア哲学、儒教、仏教、キリスト教の原点を見定めようとしてきた。本稿ではまずその成果の要点だけを述べ（詳細は原論文を¹⁾参考いただくほかはない）、そしてこの「精神革命」の本質がともに他者に対する生き方の行動原理を示すものであることを確認する。ついでそれを「横の超越」ないし「水平超越」と規定し、これを従来の「縦の超越」「垂直超越」と対比する。そしてこの「横の超越」を可能にするものとして「宇宙連関」という概念を新たに提起する。その内容は後述するが、しかしこれは決して従来の「縦の超越」を否定するものではなく、ただそれだけに留ま²⁾つていてよいのかどうか。それを越えて各宗教の宗派的地域性をのりこえて地球的な精神原理を新たに提出する必要があるのではないか——そのような問題意識の下に、以下の論述を進める。

二 世界宗教の起源としての「精神革命」

筆者の観方によれば、現在「世界宗教」と云われているものの源泉は、紀元前六世紀ごろから世界の各地で併行して起こった「精神革命」(Spiritual Revolution)に端を発する。これは筆者の比較文明論の枠組における人類史の諸転機期、「人類革命」(Anthropic Revolution)——人類の成立、起源地東アフリカ、前七〇〇万年以降）、「農業革命」(Agricultural Revolution)——農耕による食糧生産のはじまり、起源地東南アジア、メソポタミア、メソアメリカ、西アフリカ。前一万年前後）、「都市革命」(Urban

Revolution)——都市文明の誕生、起源地シユメール、エジプト、インダス、殷、核アメリカ、前三五〇〇年以降)につぐ人類の第四の大変革期である。ついで「科学革命」(Scientific Revolution)——近代科学の成立、起源地西ヨーロッパ、一七世紀)を経て、現在の「環境革命」(Environmental Revolution)——人間と環境の調和・統合)にいたっている。

「精神革命」は人類がはじめて経験した心の内部の根本的変革で、人類の精神史はここにはじまったのである。それは前六世紀から前五世紀を中心にして、ギリシアとインドと中国とイスラエルに併行して起こるが、具体的に云えばギリシア哲学と仏教と儒教とキリスト教(そのもととなるユダヤ教)の成立をさす。いま詳細をばういて、この四つの「精神革命」の発展の構造を示せば、次ページ(A)のようになる。この四つの地域には、それぞれの民族思想の「始源」となるものがあり、そしてそれが批判されて「多様化」を生み出し、そこから各思想・宗教の「師祖」が出現し、それが後継者により「祖述」発展せしめられ、それがさらに大きな帝国のなかで「拡大」するという構造をとる。それを比較的に図示すれば次ページ右図のごとくである。

さらにこの四つの地域の「精神革命」において、それぞれが究極的に求め得た「対象」、そのめざした「目標」、その用いた「方法」は相互に異なっており、それをあえて対立的に際立たせて比較して示せば、次ページ(B)のようになるであろう。

(A) 精神革命の比較的構造

始原	ギリシア	インド	中国	イスラエル
多様化	ホメロス	ヴェエダ	尚書	モーセの五書
師祖	ソクラテス以前の哲学者たち	六師外道	諸子百家	預言者たち
祖述	ソクラテス	仏陀	孔子	キリスト
帝國的拡大	ヘレニズム帝国 (アレキサンドロス)	マウリヤ帝国 (アシヨールカ)	漢帝国 (武帝)	ローマ帝国 (テオドシウス)
	プラトン	マハー・カーシャパ	孟子	パウロ

(B) 「精神革命」の求めた「究極者」と「目標」と方法

ギリシア	インド	中国	イスラエル
究極的に求めたもの	それが目指した目標	観照的〈認識〉	倫理的〈実践〉
イデア	道	ダルマ	律法
観照的〈認識〉	倫理的〈実践〉	瞑想的〈解脱〉	契約的〈救済〉
方法の特徴	論理的	直感的	思弁的
			啓示的

これはもちろん理念型的対比であり、その具体的な詳細な内容や形成過程は、先に挙げた拙稿をそれぞれ参照していただくほかはないが、しかしここでは、各「精神革命」の道筋の要点だけを簡単に記述しておく。

まずギリシアの「精神革命」は、ソクラテスによる「プシケー」(魂)の発見にはじまり、この魂の対象となる「イデア」の認識を経て、ついにその最高のものとしてのプラトンの「善」

イデアにいたる。

中国における「精神革命」は、周時代の「天」が地上に引き下ろされて人倫化されて「道」となり、孔子の儒教において、それが当初は「礼」であったが、その「礼」の根柢に「仁」がなければならぬことが見抜かれて完成にいたる。

インドで究極的に求められたものは「ダルマ」であるが、とくに仏陀においては、この世の「苦」の問題に発して、その苦のもととなる「執着」の対象が実は常に変化して止まない実体のない「縁起」——つまり「空」にほかならないことが自覚され、そこからこの世界に対する「慈悲」が出現する。

イスラエルでは、まずイエスによりユダヤ教における律法の概念とその形式化が徹底的に批判され、それを超えた直接的な神の「愛」が強調されて人々の救済へと向かう。

この四つの地域における「精神革命」には、続いて五世紀から七世紀にかけて、三つの地域で第二の「精神革命」が起こる。それは「ヨーロッパのキリスト教化」と「中国の仏教化」と「イスラムの勃興」である。この重要な事件が続かなければ、今日の宗教的状况——つまりユーラシア大陸の、西にキリスト教、中央(中東)にイスラム教、東に仏教(儒教)という現代的配置は出現しない。このうちでイスラム教はユダヤ教・キリスト教につらなるもので、やはり第一の「精神革命」とつながっている。

三 「精神革命」と「水平超越」

最初の「精神革命」に戻って、その最後の結論として出てくるギリシア哲学の「善」(アガトン、*agathon*)、仏教の「慈悲」(マイトリー・カルナー、*maitri-karṇā*)、儒教の「仁」(レン、*ren*)、キリスト教の「愛」(アガペー、*agapē*)は、本質的に云って対人関係の原理である。つまり他者に対する我々の生き方の行動原理を示していると云ってよいだろう。それを私は「水平超越」(*horizontal transcendence*)ないし「横への超越」(*lateral transcendence*)と呼んでおきたい。今日ではこの「横への超越」の対象となる「他者」(*others*)には「人」だけではなく、「自然」が加わってくることに注目しておかねばならないと思う。

ところで「精神革命」では、このような「水平超越」「横への超越」が「垂直超越」(*vertical transcendence*)「縦への超越」に媒介されていると考えた。この「縦への超越」には二つあり、それは「上への」超越と「下への」超越である。前者の超越の対象が「神」(*God*)であり、後者のそれは「無」(*Nothingness*)である。キリスト教とイスラム教(その先駆としてのユダヤ教)は前者であり、仏教のあるもの(とくに禅宗)では、インドの「空」(*śūnya*)を中国的に変様して後者になった。つまり前者では「神が汝を愛したように、汝は隣人を愛しなさい」という人から「神」へ上って行って人と人との関係に移る。後者では

人が「無」に下っていくことにより、再び人と人とが結ばれる。これらは「精神革命」の貴重な遺産で今日にも受けつがれており、なお保持研究されて然るべきものがあるであろう。「精神革命」の比較研究に従事してきた者として、それぞれの伝統の大切さやその意義や特性を十分に心得ている積りである。

しかし今日、問題はそれだけに留まっていてよいかということなのである。それでは各宗教は己の傘の下に入っているだけで、他宗派との共存という基盤を得ることはできないであろう。この点で現在一般に最も注目されているのは、いわゆる「宗教的多元主義」(*religious pluralism*)の主張であろう⁽²⁾。この立場の提唱者ジョン・ヒックのさまざまな試みは、結局異なる宗教はどれも同一の神的实在(*divine reality*)に対するさまざまな人間の応答を示しているものであり、この同一の究極实在の現れ方、それにいたる到達の仕方がいろいろ異なるに過ぎないとする。そこから諸宗教の共存をうったえるものである。しかし「精神革命」の一々の過程を比較的詳しく調べれば調べるほど、それらが成立してくる歴史的背景や地盤、その目標や方法など、地域ごとに根本的に違っており、その結果として現れる「神」や「空」や「道」や「イデア」を簡単に同一化するとはできないことが分かる。自己の宗教の立場を絶対化して他を斥ける「排他主義」(*exclusivism*)や、自己の立場を中心として他を周辺の容認する「包括主義」(*inclusivism*)は正しくないのである。もちろんであるが、この諸宗教を対等に統合しようとする

る「多元主義」も、望ましい方向性を示しているが、実行は困難であると云わなければならぬ。そもそもそれを実現する根拠がないからである。

そこで従来の考えを一変させ、実のところ、人と人、人と自然との横の結びつきこそ根源的なものであり、これを実現する「水平超越」がプライマリに重要で、「神」や「無」の「垂直超越」はそれを可能にするために求められたのだと捉えてみる。そして今日の状況において東と西の宗教的差異や対立を超え出てゆく「横の超越」の根源として「宇宙連関」なるものを提起しておきたい。

四 「水平超越」の根源としての「宇宙連関」

人と人、人と自然とを結びつけ、「水平超越」を可能とする「宇宙連関」(cosmic correlation, kosmischer Zusammenhang)とは、いかなるものであるのか。

それは宇宙のビッグ・バンからはじまって、今日の人類社会が出来上がるまでの、素粒子の結びつき、細胞の結びつき、生物相互の結びつき、人間の結びつきを実現せしめている、あえて大和言葉で云えば、「ともい、きのき、づな」である。この宇宙的規模での連関の構造は、現在の素粒子論や生命論や生態学、動物行動学、認知科学、脳神経科学、心の理論などの発達により、きわめて明らかなものとなってきている。一例として「ミラー・ニューロン」(mirror neuron)の研究を挙げておこう。

これが発見されたのは一九九〇年代で、イタリアのパルマ大学おけるジャコモ・リゾラッティを中心とする脳神経科学者たちの成果である。最初はアカゲザルの脳反応の研究をしていて、実験者が餌としてバナナを「つかみとる」とき、その実験者の脳のニューロンの活動する部位と同じ部位(F5野)が、被実験者サル脳の脳においても、まるで「鏡に移したように」活動していることが見出された。しかしこのような「ミラー・ニューロン」の現象はサルだけでなく、人と人との間においても、学習や感情や情緒の生起においても生じていることが実証された。ここにひとりの人が悲しんでいるとする。この悲しみを引き起こす大脳のニューロンの部位を今では観測的に定めることができるが、そのときそれを見ている人(たとえば私)の大脳の同じ部位のニューロンがやはり発火している(活動している)のである。つまり私はその人の悲しみと同じ悲しみを感じているのであり、そこから同情とか憐憫とかの感情移転(empathy)が起こる。つまり「ミラー・ニューロン」というのは「他者の意識、喜びや悲しみを直接理解することを可能にする」もので、人間を他者へとつなげる「他者理解」の基盤となるものと云える。そういうものが脳にはそなわっている。どうしてこの「ミラー・ニューロン」のようなものが出来上がっているのかと云えば、それは我々の共通の進化、というものを前提しなければならぬ。我々の社会関係——その道徳性の根源も、このような宇宙の「つながり」の進化の結果として生じて

いるということになろう。

もちろんこうした「宇宙連関」の諸相は、最近の諸科学・諸学問の領域でまだ個別的・分散的に研究されているだけだが、それらの成果が統合されるなら、その全貌もやがて明らかに⁽⁴⁾なるであろう。そしてこの「宇宙連関」こそが、「横への超越」を可能にする根源だと認められるときが来るような気がする。そこから道徳や倫理、そして宗教の在り方も再考察されることになる。

この「宇宙連関」は、各文化圏の地域性や特殊性に拘束されてはいないことに注目したい。キリスト教圏でも仏教圏にも儒教圏にも、イスラム圏にも、通底してあてはまる事象である。この宇宙的な相互連関を手がかりとして、地域的文化的差異を超えて、二一世紀のこれからの人類が生き合っつてゆく地球的な精神原理が新たに創出されるときが来ているように思われる。

(1) 伊東俊太郎『精神革命』の時代(Ⅰ)——ソクラテス・孔子・仏陀・イエスの比較研究『比較文明研究』第一三号、麗澤大学比較文明研究センター、二〇〇八年。

同「中国における「精神革命」——孔子を中心として」『比較文明研究』第一八号、二〇一三年。

同「インドにおける「精神革命」——ゴータマ・ブッダを中心として」『比較文明研究』第二〇号、二〇一五年。

同「イスラエルにおける「精神革命」(Ⅰ)——古代イスラエルの社会と思想」『比較文明研究』第二二号、二〇一七年。

同「イスラエルにおける「精神革命」(Ⅱ)——イエスを中心として」『比較文明研究』第二三号、二〇一八年(予定)。

(2) シモン・ビック『宗教多元主義』間瀬啓充訳、法蔵館、二〇〇八年 (John Hick, *Problems of Religious Pluralism*, Palgrave Macmillan, 1985)。

同「神は多くの名前をもつ」間瀬啓充訳、岩波書店、一九八六年 (J. Hick, *God Has Many Names*, Macmillan, 1980)。

(3) シヤロモ・リンバッチャーとコラエ・シニガリア『マラーニエローン』柴田裕之訳、茂木健一郎監修、紀伊國屋書店、二〇〇九年 (Giacomo Rizzolatti & Corrado Sinigaglia, *Mirrors in the Brain—How Our Minds Share Actions and Emotions*, Oxford University Press, 2006)。
マロ・イマロボニー『マラーニエローンの発見』塩原通緒訳、早川書房、二〇〇九年 (Marco Iacoboni, *Mirroring People: The New Science of How We Connect with Others*, Farrar, Straus and Giroux, New York, 2008)。

ヤン・フェアプレッツェ他編『モラルブレイン——脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』立木教夫・望月文明監訳、麗澤大学出版会、二〇一三年 (Jan Verbate, Jelle De Schryver, Sven Vaneste & Johan Braeckman (editors), *The Moral Brain—Essays on the Evolutionary and Neuroscientific Aspects of Morality*, Springer, 2009)。

伊東俊太郎『道徳の起源』『変容の時代——科学・自然・倫理・公共』麗澤大学出版会、二〇一三年、六九—八九頁の記述も、できたら参照されたい。

(4) その概観は、筆者の麗澤大学比較文明文化研究センターにおける連続講義「宇宙と文明の起源——我々の由来」において、一応なし終えたが、その結果はまだ活字化されてゐない。

(いとう・しゅんたろう、科学史・科学哲学・比較文明、

東京大学名誉教授)